友情と恋の間で

麻爛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
友情と恋の間で

【Ｎコード】
Ｎ０６９４Ａ

【作者名】
麻爛

【あらすじ】
瑞希と蓮沼はとっても仲良し。でも、２人は友達でしかない。そんな２人に芽生えた新たな感情が・・・

大切な友達　1

〔・・・え？何時・・・ヤバイ。〕
私はベッドから飛び降りた。時計を見ると7時３０分・・・。〔ヤバイ遅刻する・・・。〕私は急いで着替えて、リビングへ行った。テーブルの上にメモ書がいてある。
【瑞希へ今日も帰り遅くなるから、夕飯先食べといてね。レンジの中に煮物と魚があります。　母】
お母さんは看護士、お父さんは医者、だから家族が揃うことはめったにない。私はそのメモを横目でみつつ、テーブルの上にあったサラダとパンを少し食べて、身支度を整え、大急ぎで家を出た。〔こんなことなら昨日、遅くまでＴＶ見てるんじゃなかった。〕と思いつつ、通学路を走った。学校の校門をくぐりぬけ、昇降口から廊下を走りぬけた。教室の近くで予鈴が鳴り始めた。〔ヤバイ本当に遅刻しちゃう・・・。〕私は最後の力を振り絞って走った。最後のチャイムと同時に教室に駆け込んだ。そのすぐ後に、蓮沼が駆け込んだ。先生が、
「氷田、セーフ、蓮沼アウト！おまえら仲良く登校はいいが、もう少しはやくな。」
と言った。私と蓮沼は顔を見合わせた。教室中がドッと笑い出した。私と蓮沼は席に着いた。蓮沼は私の席の隣。私と蓮沼は、仲のいい友達。
蓮沼と私は、去年の春知り合った。卒業と同時に転校した私は学校で友達が出来るか不安だった。そんな私の隣の席に蓮沼がいた。私たちは自己紹介のとき、好きなバンドの話で意気投合し、友達になった。それからなんどか一緒にライヴへ行ったり、一緒に学級役員になったりして、すごく仲良くなった。だからよく、２人は付き合ってるの？なんて質問をされたが、付き合っていない。私たちは友達なのだ。私たちはよくバカをやって、先生に怒られもした。その

度に喧嘩したり、シカトし合ったりした。だけど、次の日には仲直りって感じだ。こんな2人だから、恋愛感情なんて持ってない。
4時間目が終わり、弁当の時間。私は、友達の雛乃と美奈と一緒に弁当を食べに行こうとしたとき、蓮沼に呼び止められた。
『瑞希、俺、今度部活でレギュラーになったんだ！！今度大会あるから、応援に来いよな。』
蓮沼はバスケ部だ。ここの学校のバスケ部は伝統があって、全国大会に数多く出場していて、部員も少なくない。その中でレギュラーになれるなんて、すごいことだ。蓮沼は特別背が高いわけでなく、特別運動が出来るわけでもない。ただ、練習熱心で、部活を休んだことがほとんどなかった。その甲斐あって、レギュラーが取れたのだろう。
「おめでとう！！すごいじゃん。試合いつ？？」
『え～っと・・・まって、あとで先生に聞いとくな。じゃ、俺昼レンあるから。』
そう言って、蓮沼はグラウンドに向かった。弁当は早弁したっぽい。
私は、美奈と雛乃と一緒に弁当を食べることにした。美奈が、
「ねぇ、天気いいし、外で食べようよ。」
と言ったので、私たちは外で弁当を食べることにした。中庭の渡り廊下のある場所に大きな木がある。その下に3人がけのベンチがある。私たちはそこで弁当を食べることにした。私たちはたわいもないことをしゃべった。
美「ねぇ？さっき、蓮沼君と何話してたの、瑞希？」
瑞「ああ・・・なんか、蓮沼部活でレギュラーになったんだって。」
雛「え？すごいじゃん。」
瑞「でしょ！？それで、今度の大会応援来いよって言われた。」
美「やっぱりさぁ、瑞希、蓮沼君と付き合ってるでしょ？」
雛「あ、それ私も思った！でなきゃ蓮沼君、そんなこと言わないでしょ。」
瑞「だからさ、何度も言うように、私と蓮沼は友達なの。それ以上

でもそれ以下でもないの！」
と、私が言ったとき、渡り廊下を1人の女子が歩いてきた。そのこがこっちを向いた。あ・・・。そのこは私にお辞儀して、校舎に入って行った。
雛「かわいいじゃん今の子。瑞希知り合いなの??」
美「ね、でも1年の上履きだったよ。」
瑞「知り合いっていうか・・・。蓮沼の幼馴染で、蓮沼が片思いしてる子?1年の畔さん。まぁ、いつも遠くからしか見たことないし、私のこと知ってたんだぁ・・・」
美・雛「え??今なんて言った??」
瑞「あ・・・。今のこと秘密ね。」
美「うっそ～蓮沼君って、絶対瑞希が好きだと思ってた。」
雛「ね！！うちも絶対そうかと思ってたのにぃ。」
瑞「だから、何度もいってるでしょ、私たちはただの友達なんだって。」
雛乃と美奈はイロイロ言っていたが、蓮沼が畔さんを好きだってことは、去年の夏に、一緒に夏祭りに行った時に知ったし、今更驚くことでもない。
帰りの会が始まった。蓮沼が私に話しかけてきた。
『俺、さっき先生に大会の日程聞くの忘れたから、今日メールするな。』
「あ、わかった。部活がんばってね♪絶対優勝しなよ！！」
『分かってるって。俺をだれだとおもってるんだい、瑞希君?』
「え・・・蓮沼だから心配してるんだけど・・・。」
『うわっ、お前ウザッ』
「あ！そうだ・・。ねぇ?蓮沼、畔さんに私のこと話した??」
『え?んーっと・・・。話したけど何で?沙雪がなんかした?』
「そうじゃなくてさ、今日初めて会ったのに、挨拶されたから・・・」
『沙雪が?ふーん。／／／／／』

「なに赤くなってんのよ?蓮沼は本当に畔さんのこと好きなんだねぇ。告っちゃえばいいのに?」
『うるせーな。それが出来たら苦労しないっつーの』
そんな会話をしていると、学級会長が号令をかけて、下校となった。蓮沼はすぐさま部活に行ってしまった。雛乃と美奈は部活があって、帰宅部の私は1人で帰る。途中で先生に呼ばれて、なんか掲示物の手伝いをさせられた。その後、私は1人下校した。
グラウンドでは、サッカーや野球、ソフトなどいろんな部活が活動している。その中で一際目立つのが、バスケ部。3面のバスケットコートがある学校なんてそうそうないだろう。体育館もバスケ部専用の地下室が設けられているし。バスケットコートをフェンス越しで少しの間、蓮沼のがんばりを見ていた。みんなが少し手を抜いて基本練習している時、蓮沼だけは必死で練習していた。
「蓮沼元気いいねぇ・・・。」
と、私が1人ごとを言った時、隣に畔さんがいた。畔さんは、蓮沼を見ていた。しばらくすると、畔さんは私に気づいて、その場から駆け出した。私は畔さんを追った。畔さんは急に立ち止まった。
「私・・・大丈夫・・・。私、准樹君と氷田さんの邪魔するつもりありませんから。ただ・・。」
と。畔さんは涙声で言って、立ち去った。〔なんだ・・・蓮沼と両思いじゃん・・・。〕私は、1人そこで立ち止まっていた。秋風がビューッと吹いて、私の体に冷たくあたった。
「寒っ・・・。風邪ひいちゃう。早く帰ろう。」
私は、その場を離れて、校門へ向かった。枯葉が落ちて、なんだか、急に寂しくなった。〔何で?蓮沼と畔さんは両思いなんだよ。友達が、幸せになれるなれるんだよ・・・〕私は、1人で枯葉の散る道を歩いた。空を見ると、きれいな夕焼けで、私の心は、安らいだ。

大切な友達　2

その日の夜、ずっと待っていたが、蓮沼からのメールは来なかった。
「ちっ・・・。なんだよ蓮沼のやつー。明日、一発殴ってやる！」
私は、携帯をながめながら、つぶやいた。蓮沼からのメールが来ないなんていつものことだ。次の日、何かと理由をつけて謝ってくる。だから、メールが来なくてもおかしくないはずだった。なのに、妙な胸騒ぎがした。今日の畔さんとの出来事が頭から離れなかった。
〔畔さんと蓮沼は両思い・・・。蓮沼はうちの大切な友達・・・。蓮沼が幸せなら、私も幸せなはず・・・。蓮沼が畔さんのこと好きだって知ってたのに、どうして胸が苦しいんだろう〕そんなことを考えながら、私は眠りについた。このまま明日にならなければよかったのかな・・・。

太陽の光がカーテンの隙間から部屋の中に差し込んできた。私は目を覚ます。その目には涙の痕。なぜ流れたのか私は知らない。私は、起き上がり、カーテンを開けた。眩しい秋の太陽。その光をいっぱい浴びながら、私は朝食を食べる。1人の朝食は、慣れている。私は朝食を食べている最中、くしゃみ、鼻水が止まらなかった。
「風邪・・・ひいたかな・・・。」
食事を済まして、身支度を整えて、私は家を出た。私はいつもの通学路を1人で歩き始めた。その時、携帯がなった。携帯を見ると、蓮沼からメールだ。【昨日メール出来なかった。ごめんな。で、今日一緒に学校行こうぜ！今、俺お前の後ろにいるから】私は後ろを振り向くと、蓮沼がニカッと笑って立っていた。
「蓮沼さ、いちいちメールしないでよ。直接声かけてくれない？」
『悪い？なんかシカトされたら困るからさ。』
と、蓮沼が笑って言った。

蓮沼は、私の隣に並んだ。
「で、何か用あるの？」
『あ、大会の日程な、３週間後の土曜日に９時から、地区大会があるって、場所は、俺らの学校だって。』
「分かった。え、まって、その前の金曜日、”ザ・ハリケーン”のライヴじゃなかった？」
『うそ？マジで？？ぅわーどうしよう』
「蓮沼、行くのやめる？」
『ん・・・、行く！“ザ・ハリケーン”は俺の永遠のあこがれだ！見ないわけにはいかないだろ』
蓮沼は熱く語っている。それを横で聞きながら、私は鼻水をすすっていた。その時、強い風邪が吹いた。
私は、たまらずくしゃみをした。それをみた蓮沼が、
『お前、風邪ひいた？これでも羽織れよ。』
と言い、私に自分の学ランを被せた。蓮沼の学ランは私の体がすっぽりとはいるくらい大きかった。
「ねぇ蓮沼、これ着て学校行くのかなり恥ずかしいんだけどぉ。」
『いいじゃん、結構似合ってるぞ、ほら、女番長みたいで（笑）』
「何それ～ウッザー（笑）」
私と蓮沼は大声で笑った。こんな日々がいつまでも続くと思っていた。蓮沼とおもしろおかしく過ごす日々が終わらないでほしかった。
　しばらく一緒に歩いていると、前に畔さんが通りかかった。私が、蓮沼の腕を引っ張ると、蓮沼の顔はもう真っ赤だった。畔さんは、１人で歩いていた。蓮沼の様子を見て私は、
「気になるなら、話しかけてくれば？私１人で学校行くし。」
『何強がってんの？一緒に学校行って欲しいくせに。』
「はぁ？そんなわけないでしょ。」
私は、蓮沼を睨みつけた。そのあと、後ろを向くと、美奈と雛乃がいた。２人でこっちを見ている。

「蓮沼、畔さんのとこ行きなよ！私は、美奈たちのとこに行くからさ。」
そう言って、蓮沼に学ランを渡した。蓮沼は、少し戸惑っていたが、顔を真っ赤にさせながらも、
『分かったよ。そんじゃ、またあとで。』
蓮沼は私を残して畔さんの所へいった。蓮沼が畔さんに声をかけている。何か楽しそうにしゃべっている。そんな姿をただ見守っていることしか出来ない私。私も一緒に2人の中に入りたい。けど、無理。あの2人の中に私の入る隙間なんかあるわけないのだから・・・。
美・雛「おはよう瑞希！」
そんな私もとに、雛乃と美奈がやって来た。
美「ねぇ？あれ、昨日の畔さんじゃないの？」
雛「蓮沼やるじゃん。てか、瑞希は別れたの？」
2人の言葉が微妙に心をつつく。
瑞「だから、私たちはね、付き合ってないし、別れてもない、友達なの！。」
美「えぇーそんなのつまんないよぉ←←」
雛「ねぇ、三角関係って感じで、おもしろそうだったのにぃ・・・」
瑞「ねぇ、2人ともさ、私の不幸な姿がそんなに見たいわけ？」
美・雛「そんなことないよぉ！！（笑）」
私たちは笑いながら学校へ向かった。
　朝の会。隣の席の蓮沼は、まだ畔さんとの余韻にひたっている。その光景は結構面白い。
《じゃぁ、そろそろ席替えするか。》
先生の声に生徒の歓喜の声。［えっ？席替え？蓮沼と席が離れちゃう］私が蓮沼の方を向くと、蓮沼も私のほうを見て、目が合った。今までだって、隣じゃない時だっていっぱいあった。隣になるほうが珍しかったのに、蓮沼と席が離れたら、もう一緒にいられないのではと、心配になった。

『なぁ、瑞希、また一緒の班になれるといいな』
蓮沼の声。その声が私の心を安心させた。
「そうだね！でも、またイロイロ冷やかされちゃうかもよ（笑）」
『そんなことねぇよ、だって俺ら、友達じゃん。』
私は一瞬頭の中が真っ白になった。蓮沼の何気ない一言が私の心に刺さった。［私は何を期待していたの？そうじゃん蓮沼と私は友達。どうして心が痛いの？］　そんなことを考えているうちに、席替えのくじ引きの箱が回ってきた。私はおそるおそるくじを引いた。くじの番号は１３・・・。何か不吉な予感。
『あー俺、１番前じゃん。最悪←な、瑞希何番？』
蓮沼は１番前の席？１３番って１番後ろじゃん。一緒の班ですらないじゃん。
「え？窓側の１番後ろだよ。蓮沼は？」
『うっそー、俺と一番遠いじゃん！俺、廊下側の１番前だし。』
こんなもんだよね・・・。うちらに縁なんて無いんだし。私は机を動かした。窓側の１番後ろの席は、静かで寂しかった。秋の日の光が机を照らしている。窓が開いて、たまにビューッと風が通り過ぎた。私はその度に身震いした。どうやら、本気で風邪ひいたらしい。
　昼休み、体がだるくて、私はとうとう保健室へ行った。でも、あいにく保険の先生が不在。私は１人でベッドに横になった。どんどん病状が悪化していく。［だれか・・・。来てくれないかな・・・・氷が欲しいんだけど］そう思ったとき、保健室のドアが開いた。入ってきたのは、蓮沼だった。
『先生いますか？』
と言った。保険の先生はいるはずがない。蓮沼は自分で怪我をした足に消毒液を塗っている。かなり慣れた手つきだった。私は蓮沼の姿を目で追っていた。［私のことに気づいて！氷、氷・・・。］
その時、ベッドの隣にあるテーブルの上のペンが落ちた。それに気づいた蓮沼が私の方へ来た。蓮沼はペンを拾って、テーブルの上に置いた。その時、私と目が合った。蓮沼は少し驚いてから、

『何？お前具合悪いのか？なんか顔色悪いぞ。』
と、聞いてきた。
「うん・・・。なんか熱っぽい。だるくって・・・。」
『熱？ちゃんと計ったのか？どれどれ？』
蓮沼が私の額を触った。ひんやりとして気持ちかった。
『お前、超熱いじゃん。ちょっと待ってろよ。えっと、胸が苦しかったら、ボタン１つはずせよ。あとできれば靴下ぬげよベッドに寝るときは。』
私は蓮沼が言ったとおり、制服の第一ボタンをはずした。そして靴下を脱いだ。その間に、蓮沼が氷を作ってくれた。
『汗掻いてないか？今、先生に連絡したから、あと１０分したら、来るってさ。』
「ありがと・・・。何か蓮沼こういうこと慣れてるね？」
『慣れてるっていうか・・・。沙雪がよく病気になるから、俺が看病したんだ。俺の両親も沙雪の両親も仕事で忙しかったからさ。』
蓮沼が言った。私優しく見つめる蓮沼の目・・・。いや、その目は私のことを見ているんではない。私を通して、昔のほとりさんを見ているんだ。そう考えるとなぜだか凄く哀しくなった。ふと、私は蓮沼から目をそらした。まぶたの裏が熱くなってくる。
「ね、蓮沼はさ、畔さんのことどう思ってるの？」
涙が出そうになるのをグッとこらえて、私は聞いた。
『今さら言わなくても分かってるだろ。』
「ちゃんと言ってよ。蓮沼は、畔さんのこと好きなんでしょ？」
『・・・ああ。好きだよ。それが？』
涙が頬を１粒伝わった。私は急いでそれを拭いた。私はこれ以上耐え切れない。早く２人がくっ付いちゃえばいいのに。私は感情にあわせてつい口走った。
「じゃあ、早く告っちゃいなよ。なんで告らないの？」
『そんなの俺の勝手じゃん。』
蓮沼は少し怒った口調で言った。私の口は止まらない。

「そうだけど。蓮沼、男でしょ？ビシッとしなさいよ」
『うるせーよ。お前に関係ねーだろ。』
蓮沼は怒って言った。私はムカついてそっぽを向いて。布団を被った。
『ごめん。言い過ぎた。』
蓮沼が見かねて言った。涙を噛み締めた。
「蓮沼、さっさと畔さんのとこに行ってきてよ。大丈夫だから・・・・。」
『行けねーよ。こんなお前1人にして行くほど俺はヒドイやつじゃない。』
蓮沼はいいやつ。いい奴過ぎるのがたまに傷。優しくされたら困るときだってあるのに。
「ね、私は蓮沼が好きだから、幸せになって欲しいの。はやく幸せな姿私に見せてよ。」
そう言って、私は蓮沼を見た。その時、保健室のドアが開いた。
「先生？怪我しちゃったんですけど・・・。」
畔さんだった。畔さんは中に入ってきた。「気づくな・・・気づくな・・・」そう思ったとき、畔さんは私たちに気づいた。畔さんはビックリしてから、困惑気味で、少し悲しそうに言った。
「あ・・・、ごめんなさい・・。邪魔でしたよね？」
畔さんは俯いてから走って保健室を出て行った。私は起き上がって、
「ね、蓮沼、畔さん私たちのこと疑ってるの、お願い、私は大丈夫だから、蓮沼さんのとこへ行って。じゃないと、私が気分悪くなるの、お願い。」
蓮沼に言った。蓮沼は私をジッと見ている。
『俺・・・・やっぱ』
「早く行け！男だろ、ビシッと決めて来い。」
蓮沼が言いかけたのを私は止めて言った。
『わかった・・・。』
蓮沼は私を置いて、畔さんを追いかけた。蓮沼の後姿をみているの

が辛かった。
私は、１人になった保健室で布団に包まって泣いた。どうしてだろう、蓮沼は私の大切な友達。蓮沼が幸せなら、私も幸せなはずなのに、どうしてこんなに心が痛いのだろう。友情の中から少しはみ出てきた感情・・・。明日になれば、元通りになるよね。だから、今日はうんと泣いてもいいよね・・・・。

畔さんと蓮沼さんは上手くいったみたいだ。いろいろあったけど、結局、私はいつもどおり蓮沼の友達をやっている。
畔「ね、准樹、氷田さんっていいひとだね。」
『ああ、だからあいつは俺の１番大切な友達だからな』
そう、私と蓮沼は今までも、これからもずーっと大切な友達だ。

友情から芽生えた・・・1

俺が沙雪と付き合いだしたて1週間。これも、全部瑞希のおかげ。俺は本当に感謝してる。あいつは俺の1番の友達だ。今までも、そしてこれからも・・・・。少なくとも俺はそう思っていた。

『おっはよー蓮沼、今日は1人なの??』
俺が1人で学校へ登校していると、瑞希が俺の肩を叩いていった。最近はよく沙雪と登校している。
「よ、瑞希、沙雪は今日休むって。」
『ふーん。病気?看病してあげないとね、私のときみたいにね。』
「そうだな。あれからお前大変だったんだろ、俺が沙雪に告ってる間、うなされてたんだって?」
『そうそう、本当に大変だった。その後まるまる3日間寝込んじゃったしさ。』
俺と、瑞希はあの日のことを思い出した。あの日、俺と沙雪が付き合うことになった日・・・。

瑞希に言われるがまま、俺は沙雪を追いかけた。沙雪は、中庭の大きな木下にあるベンチに俯いて座っていた。俺は沙雪のそばに行った。沙雪は、泣いているようだった。俺は沙雪の隣に座った。沙雪は俺に気づいていた。
沙「准樹?氷田さんはどうしたの?」
沙雪は涙を流しながら言った。俺は沙雪をみた。あいかわらず下を向いていて、俺の顔を見ようとしない。
准「氷田は、大丈夫だって・・・・。お前が心配だったから・・・。」
沙「私なんかほっといて。」
准「ほっとけるかよ。」

俺は思わず怒鳴ってしまった。
准「ごめん・・・。」
沙雪はだまっている。俺は沙雪の体が震えていることに気づいた。
沙「ばか・・・。准樹は優しすぎるの、今の私に優しくしないで。」
声も震えていた。俺は思わず沙雪を抱きしめた。沙雪はビックリした様子だった。俺は強く沙雪を抱きしめた。
沙「・・・いた・・いたいよ。准樹どうしたの・・・」
沙雪の声に俺は我に返った。
准「ぁ・・・ごめん・・・。でも俺・・・、俺お前のことが・・好きなんだ」
俺はすんなりとその言葉を言ってしまった。もう後には戻れない。そんな俺の心配をよそに、沙雪は嬉しそうな顔をして、俺に抱きついてきた。
沙「私も、准樹がずっと・・・好きだったの。」

「なぁ、瑞希、本当にありがとな。イロイロと、今度は俺がお前を応援しなきゃな。」
俺は、大真面目な顔をして瑞希に言った。それを聞いた瑞希は笑って、
『そんな改まって言わないでよ。それに私は今のとこ“ザ・ハリケーン”が見れれば、文句ないからね☆』
と言った。その言葉に2人して、大笑いした。そのあとも俺たちは一緒にしゃべって、笑って、学校へ向かった。朝からハイテンションな気分だった。そういえば、瑞希と一緒に行くのは久しぶりだった。
　学校へ着いてから、俺は席に着いた。隣の席に瑞希はいない。隣には、瑞希のダチの藍野美奈がいた。藍野は、本当に女の子って感じで、俺はちょっと苦手だ。瑞希の席のほうを見た。瑞希の隣にいるのは、富永柴音だ。瑞希と楽しそうにしゃべっている。俺はふと、思い出した。前に聞いたことがある。富永が、瑞希のことを好

きだって・・・。俺は少し不安になった。仕度を終え、瑞希のところへいってみた。
『あ、ねぇ？富永、うち英語の宿題忘れちゃったんだぁ・・・・・。』
「俺は、やってきてあるけど・・・・。」
『本当？お願い！貸して！！本当にお願い！』
「え～・・・。ま、今度何かおごってくれるならいいけど。」
『分かった！！じゃぁ、借りるね！！』
瑞希と富永・・・。なんかかなり仲いいじゃん。俺が瑞希の前の席に腰掛けた。瑞希は俺をみて、
『ねぇ？、蓮沼、富永も“ザ・ハリケーン”好きなんだって！今度3人でライヴ行かない？』
と、言ってきた。俺は少し癪に障ったが、てきとうに相槌を打っていた。瑞希はどんなやつともすぐに仲良くなれる・・・・。でも俺は無理だ。すぐには仲良くできない。
『あぁ！蓮沼、私今日放送委員の当番だった。もういかなくちゃ、ちょっとこれ、写しといて！！』
瑞希はいきなりそう言って、教室を後にした。俺は仕方なく瑞希の席に座って、英語の宿題を写していた。すると、富永が話しかけてきた。
富「ねぇ、蓮沼君、もしかして・・・・氷田さんと付き合ってる？」
准「俺が瑞希と？ありえない。俺は違う奴と付き合ってるから。」
富「なんだぁ・・・・良かった。あ、なんて言うか、俺、氷田さんの事すきなんだよね。」
俺は一瞬ドキッとした。
准「そうなんだ・・・。がんばれよ」
と、俺が言ったら、富永は調子に乗りやがって、こんなことを言ってきた。
富「じゃあさ、俺の恋、手伝ってくれない？」
俺は断った。富永と瑞希が付き合うなんて考えられないし・・・。
てか、俺何やってるんだろぉ・・・・。自分で虚しくなってきた。

それから、瑞希と俺と富永の微妙な関係が始まった。
３日後、病気が治った沙雪と俺は学校へ行った。沙雪は楽しそうにいろんなことをしゃべっていたが、俺は上の空だった。全然笑いもしないで歩いていた。すると、前の方に、富永と瑞希が歩いているのが見える。俺はムシャクシャした。何でだろう。俺には沙雪がいるのに・・・・。
学校に着いても、瑞希と俺が一緒にいる時間は急激に減った。瑞希は沙雪に遠慮してか、俺に近づこうとしない、それをいいことに、瑞希の近くに、いつも富永がいた。富永の存在はとても目障りだった。俺は、瑞希のそばにいった。富永は日直でいなかった。
「瑞希、明日部活で練習試合あるんだけど、見に来いよ。」
俺が言った。でも、瑞希は首を横に振る。
『ねぇ、蓮沼の彼女は、畔さんでしょ？何で私が行く必要があるの？畔さんに失礼だよ。』
そう言った。かなりショックだった。やっぱり、彼女を持つと、前みたいになれないのかなぁ・・・・。俺は瑞希との距離がどんどん離れていきそうで、凄く怖かった。瑞希と俺は超仲良しな友達。でも、そのポジションを富永に奪われそうでならなかった。俺は、瑞希の何なのだろう？
練習試合の日。瑞希は来なかった。１年のときは、俺が試合に出るとなったら、いつでも駆けつけてくれたのに・・・・。沙雪がスポーツドリンクを差し入れしてくれた。それを飲みながら、コンディションを整える。
「がんばってね、准樹！」
「おぅ・・・。」
沙雪の声が俺の耳を通り過ぎる。いつもの瑞希の応援はない。
その日、俺は途中で交代させられた。こんなの初めてだった。いつもフルセットコートに出ている俺が、前半１５分で出番が終了してしまったのだ。目立った活躍どころか、エラーをしまくった。瑞

希の応援がないと調子が狂う。
　それからも、俺と瑞希はぎくしゃくしたままだった。前のように戻れないのかな・・・。俺が1人悩んでいると、藍野さんが
「ね、蓮沼君、最近瑞希と一緒にいないね、どうしたの？」
と、聞いてきた。
「別に・・・。なんか、俺に彼女が出来たからかな・・・。」
俺は、藍野さんに内容を話した。藍野さんは黙って聞いていた。それから、
「そっか・・・。もしかしたらさ、2人とも、友情じゃない何かが芽生え始めているのかもよ？」
と言った。その意味が俺にはよく分からなかった。友情じゃない何か・・・何だろう。
　大会が近づき、部活が忙しくなってきた。俺も一生懸命やろうと思うのだが、なぜかしっくりこない。瑞希の応援がなくては・・・。沙雪は優しく、いつも練習にきて、マッサージしてくれたり、差し入れをくれたり、励ましてくれたりしたが、それでは物足りなかった。沙雪がいけないのではない。ただ、俺には瑞希が必要なのだ。そうしているうちにも、瑞希と富永はどん？仲良くなっていった。
　ある日、瑞希と帰りが一緒になった。久しぶりに一緒に帰る。
『蓮沼、もうすぐだね、大会！本当、がんばってるよね☆』
瑞希の明るい元気な声。俺はこの声を聞くと安心する。
「あぁ・・・。絶対優勝しないとな。」
『あ、ライヴ明後日だよね。あのさ、富永がね、ライヴのとき送ってくれるって。』
「分かった。じゃぁ、俺、どうすればいい？」
『とりあえず・・・、ライヴ7時からだから、5時頃うちに来てくれる？』
「了解」
瑞希とはわりとスムーズに話せた。富永に送ってもらうのか・・・。俺と瑞希が橋の上を通りかかったとき、きれいな夕焼けが映し出さ

れた。
『蓮沼、超キレイな夕焼けだよ。明日いいことあるよね！』
「だといいな。」
その夕焼けを2人でずっと眺めた。そのうち、辺りは暗くなり、星が輝き始めた。
『ね、私らがこんなのん気でいられるのってさ、いつまでだろうね？』
「さあな・・・。今年までじゃん？来年は受験だし、その後同じ高校行くのかわかんねーし・・・。」
『そっか・・・なんか寂しいね。。』
俺は瑞希をみつめた。瑞希も俺をみつめている。こいつ・・こんなに可愛かったっけ？俺はそう思いながらみつめ続けた。その時、冷たい風が頬にあたった。
『もう遅いし、帰ろっか。』
「あぁ・・・」
俺たちはその場から離れて、また歩き出した。月の光が、俺たち照らしているかのように、明るくキレイだった。いつもの曲がり角、瑞希と別れる場所・・・・。
『じゃ、また明日ね。ライヴ楽しみだね！』
瑞希が言った。辺りは真っ暗なのに気づいて俺は言った。
「もう暗いし、家まで送るよ。」
でも、断られた。彼女のいる男が、違う女を家まで送るなんていけないと言われた。瑞希は自分の家に向かって行った。その後ろ姿を、見ていると、悲しくて、寂しくて・・・・不安でいっぱいだった。
　次の日、富永と瑞希は相変わらず仲良くしゃべっていた。俺の隣には沙雪がいる。沙雪は俺の彼女、俺は沙雪が好きだ。じゃぁこの胸騒ぎはなんだ。富永と瑞希が仲良くしゃべっているとこは見たくない。これはわがままなのか？
「准樹？明後日大会だね！がんばって♪」
沙雪はカワイイし、優しい、俺の好きな人。俺の彼女・・・・。

「あぁ・・・。」

そっけない返事をした。俺は、今のままでいいのか？俺は・・・・。

友情から芽生えた・・・2

ライヴ当日。瑞希の家へ出かけに行く。待ちに待った“ザ・ハリケーン”のライヴ。心躍らせながら、瑞希の家へ向かった。瑞希の家の前で立ち止まった。最近ずっと来ていなかった瑞希の家・・・。玄関のチャイムを押した。

『あ、蓮沼？早かったじゃん。入って。』

瑞希が出てきてそう言った。俺は瑞希の部屋へ行く。前に瑞希の部屋に来たのは、壁中に“ザ・ハリケーン”のポスターが張り巡らされていて、本棚には“ザ・ハリケーン”関連の雑誌、ＣＤが所狭しと、ならべられていて、ものすごい音量で音楽が流れていた。これが本当に女の子の部屋なのかと、不思議に思ったほどだ。久しぶりに瑞希の部屋に入ると、あまり変わったところはなかったが、微妙にポスターの種類や、雑誌の量は変わっていた。

『あ、これ、富永に貰ったポスター。ほら、カッコいいでしょ？』

と、瑞希は“ザ・ハリケーン”の新しいポスターをみせてくれた。本当にメンバー全員がかっこよく写っていた。瑞希は、ジュースと菓子を持ってきて、ミニテーブルに置いた。

『超楽しみだね！本当、最高な気分だよ！』

「俺も。何歌うのかな？新曲歌ってくれるといいな。」

『うん！でも、どれもいい曲だから、何歌っても嬉しい♪』

俺たちは、それからずっと“ザ・ハリケーン”のことについて熱く語り合った。時間も忘れ、この時間がずっと続いていたら。

そんなことをしているうちに、富永が来た。俺たちは、富永の車に乗り込んだ。車内では、“ザ・ハリケーン”の音楽が鳴っている。その切ない歌詞に、俺は胸がジンとした。

『ね、富永はライヴよく行くの？』

「あんま行かねーな。一緒に行く人いないから・・。」

『ふーん。私はね、蓮沼とよく行くんだよ。生で曲聴くと、本当に泣けるよ！』
瑞希は、富永と話している。楽しそうに・・・。俺のポジション、奪われたのか。楽しみだったはずのライヴが、急に、窮屈なものとなった。瑞希にとって、俺の存在は、なんなのか・・・俺より、富永がいいのだろうか・・・富永は瑞希と仲がいい。俺よりも・・・、ずっとずっと・・・自分がちっぽけに見えた。
　その日、ライヴが終わってから、俺は瑞希の家へ行った。富永は用事があったらしく、先に帰った。瑞希の手にはたくさんのグッズがある。俺の手元には、１つ、瑞希が一緒に買おうって言ったのでかった、キーホルダーがあった。
『楽しかったね・・・。はぁ、また行きたいな。超最高だったぁ・・・』
余韻にひたりながら、瑞希が言った。
「あぁ・・・」
『ねぇ、今日、蓮沼変だったよ。元気無いじゃん、どうしたの？』
「別に？変だった？」
瑞希は俺の異常に気づいていたのか？あれだけ富永と一緒にいたのに。俺は1人で2人の後を付いていってたのに。俺はなぜだか、無性に腹が立った。
『そっか・・・。だってね、なんか1人でボーッとしてたしさ、無口だったじゃん。』
「それは・・・お前と富永が仲良くて入る隙間がなかったから・・・。」
『何で？いつもなら、無理やりにでも、入ってくるくせに。』
瑞希は少し怒った。
「お前ら仲いいから、お前だって富永と一緒にいたかったんだろ。俺が邪魔しちゃ悪いしさ。俺より富永がいいんだろ！」
何言ってるんだ？俺？これじゃ、まるで富永に嫉妬しているみたいじゃん。瑞希は、俺の言葉に怒った。

『そんなこと言わないでよ！蓮沼の方がいいよ。だから、畔さんのことも協力しだよ。富永は好きだけど、蓮沼の方がもっと大好きなの！・・・なのに、どうしてそんなこと言うの？』
瑞希は俯いて、泣き出した。
「ごめん・・・。」
俺は瑞希に触れようとした。瑞希はそれを嫌がり、
『出てって・・・。今は、蓮沼の顔見たくない。蓮沼には何気ない一言かもしれないけど、私はかなり嫌な言葉だったの。蓮沼のこと、信じてたのに・・・。』
瑞希は、なきながら言っている。その涙を、俺は拭いて、抱きしめてやりたかった。でも、涙を流させたのは俺。俺にそんなことをやる資格はない。俺は荷物をもち、ドアの前に立った。
「瑞希、明日・・・バスケの大会あるんだ。来てくれるよな。俺、お前の応援がないとダメなんだ。今日は本当にごめん。俺、どうかしてた。明日、待ってるから。」
俺は最後にそういって、部屋を出た。おばさんに挨拶をして、家に帰った。
後悔・・・。その言葉が今の俺を表す言葉。どうして、あんなこと言っちゃったのだろう・・・。俺、瑞希の彼氏でもなんでもないのに、瑞希が誰と仲良くしようと、俺には関係ないのに・・・。俺は、その夜、何もやらず、ただひたすらなき続けた。大会のことより、瑞希の方が気になって、気になって・・・。俺にとって、瑞希の存在ってなんなのだろう・・・。友情じゃない、何かって・・・。

大会の日、極度の寝不足で、やる気がでてこない。そんな俺を沙雪が励ましてくれる。沙雪が悪いわけじゃないが、俺はそれを嫌がり、1人になった。いつになっても、瑞希は来ない。俺は体育館の入り口をずっと見ていた。
「来るはず無いか・・・。」
監督が、選手を呼んだ。軽くウォーミングアップをしてから、いよ

いよ、第一試合開始だ。俺たちは、第二試合なので、時間がある。ほかの選手は練習している中、俺は緊張感と疲労で、とても動ける状態じゃなかった。第一試合が終わりかかっても、瑞希が来る気配はない。第一試合が終了した。

とうとう俺たちの出番。コートの中に入る。心臓がバクバクいっている。いよいよ、試合が始まった。実力的には俺たちのほうが数段上手だ。見方からのパスも、シュートも順調。みんなコンディション抜群なのだろう。俺はそれについていくのが精一杯。そのため、俺の失敗のために、３ゴールも決められた。１６対６・・・。その６点は俺のせいで入れられたもの・・・。自分を責めて、どんどんやる気が落ちていく。監督、早く俺を交代させて・・・。その時、パスを貰って、俺はドリブルをし、シュートを打ちにいった。相手のＤＦをかわし、突っ走る。

シュートを打とうとしたとき、ＤＦにタックルされた。俺は気を失い、そこに倒れこんだ・・・。もうダメだ・・・、俺は終わった。

その時、かすかに声が聞こえてきた。聞き覚えのある、元気で明るい・・・。

『・・ぬま・・・蓮沼！何やってるの！立ち上がって！シューと打たなきゃ！』

ハッとして俺は立ち上がった。瑞希だ。瑞希が来てくれたのだ。審判に

「大丈夫ですか？」

と聞かれた。俺は力強くうなずいた。さぁ、ここから、俺の反撃だぜ！俺はその後、３Ｐを決め、シュートを打ちまくった。瑞希が応援してくれている。それがとても力になった。俺は気づいた。瑞希が俺にとっての瑞希の存在を・・・。友情から芽生えたなにかを・・・。この日、俺は何点シュートを決めたかわからないが、とっても気持ちよくできた。結果はもちろん地区大会優勝だ。このあとの、県大会も優勝してやる！！

試合後、俺は沙雪に別れを告げた。沙雪のことを俺は本気で好きだった。それに間違えは無い。ただ、俺にはもっと大切な人がいた。ただ、それだけだった。沙雪が俺を恨むからそれでいい。俺から沙雪への思いに嘘は無かったのだから・・・。

俺は沙雪と別れ、瑞希のところへ行った。瑞希は笑顔で俺を迎えてくれた。その笑顔が、俺の心を和ます。

『蓮沼、大活躍だったね。感動したよ！』

「サンキューお前のおかげだって。」

俺と瑞希は互いの顔を見合った。昨日の出来事は何も無かったかのように、澄んだ目をした瑞希。俺はおもわず瑞希を抱きしめた。

「俺さ、さっき、沙雪と別れたんだ。」

『え？何で？良かったの？』

「もっと大切な人が見つかったから・・・・。沙雪は好きだけど、俺の隣にいつもいて欲しい奴は沙雪じゃない、瑞希、お前なんだ。」

俺は、自分の気持ちを素直に言った。瑞希は真っ赤になって、

『私も・・・、蓮沼の隣にいたい。』

俺と瑞希は大切な友達。だから今まで気づかなかった。友情の陰に隠れた本当の気持ち、

友情から芽生えた何か・・・恋を・・・

心の中で・・・

あれからいくつもの時が過ぎた。

あのあと、私と蓮沼は付き合ったのかよくわからない

私たちは前のようにいつも一緒に過ごし、楽しく笑い合っただけだから・・・

そしあと、私と蓮沼はそれぞれの高校へ行き

それぞれの人生を歩んだ。

そして、それぞれの人と結婚し、それぞれの子供も持った。

あんなに仲がよかったのに、今では会うことも無くなった。

しかし、私たちは確かにあの時、恋をしていた。

今でも私の心の中には、蓮沼とのあまずっぱい思い出でいっぱいだ。

ね、蓮沼元気？私は元気だよ！！！いつかまた会えたら

思い出話に花咲かせようね。

今まで蓮沼を忘れたこと無かったよ

だって蓮沼は私の、初恋の相手だからね！！

THE ETERNAL LOVE

END

心の中で・・・（後書き）

最後まで読んでくれてありがとうございました。
下手ですがこれからもがんばりますので
よろしくおねがいします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0694a/

友情と恋の間で

2010年10月12日05時37分発行